

『幼児の笑いと発達』  
友定啓子著（勁草書房）

内藤 知美



ジャングルジムに登ろうとして、K夫は、手をすべらせ、ドンと尻もちをついた。大声で泣き叫ぶK夫。が、次の瞬間、シーソーまで全速力で駆け出して、ニーツと笑ってこちらを振り返った。

子どもの表情は多様で、めまぐるしく変化するが、その表情の中でも、子どもの笑い顔はとりわけ魅力的である。赤ちゃんの笑い顔をみただがために、思わず百面相に夢中になった経験

をもつ人も多いのではないか。

子どもたちの世界を見ると、笑いに溢れ、笑いの息づかいが絶え間なく聞こえてくる。子どもの世界は、笑いの中に成立すると言え、それは過言であろうか。本書のテーマは、この子どもの笑いにある。「幼児にとって笑いとは何か」。一見壮大に見えるこの問いを扱いつつも、子どもの笑いの世界に触れ合い、常に眼前にその世界を見ている著者には、力み

や気負いは感じられない。

著者は、何よりも保育を、子どもと大人の織りなす生活世界の現象として捉え、子供との間に育まれた共感性の下に、子どもたちの「笑い」を掬い上げる。「自分の順番が来るのを待ちきれずフハハと噴き出してしまう二歳児E子」、「柵につかまって、自分の力で立ち上がりニーツと笑った〇歳児X夫」、「雲の切れ間に射し込んできた陽の光りに、『あーっ』と声をあげた一歳児C夫」など、ややもすればこぼれ落ちてしまいうような笑いのディテイルを描き出すことによって、子どもの発達のプロセスを探る。からだと結び付く笑い、知的な認識に伴う笑い、人間関係の構築に伴う笑いという三者を主軸にしつつ、相互に関連するそれら三者のダイナミズムの中に、発達の過程をたどる。

本書によれば、その過程は次のようである。子どもは、笑いの表情と共に、心とからだの共

鳴動作を楽しみ、わかる喜びを享受し、異質な世界を取り入れる。時には、「おしり」「うち」といったからだのタブーに関わる「笑い」を巧みに使いながら、相手との親和関係を樹立し、確認しようと積極的に働きかける。人との関係、集団との関係の中で、子どもは、嘲笑というような攻撃性をもつ笑いの意味をも読み取り、あるいはそれをコントロールすることを学ぶ。やがて、子どもは、笑いの社会的・文化的な機能を理解し、笑いは複雑で多面的なものとなる。

本書では、「笑顔の下に、自分自身に出会い、他者に出会い、この世界に出会い、その中でいかに自分自身をつくりあげていくか」という自我の形成のプロセスが、確かな観察力で捉えられている。保育者として、子どもと共に生活世界を創り上げながら、笑う主体としての子どもひとりひとりの世界の中で、その笑いの意

味をくみ取り、そこに理論的な枠組を見いだそうとする著者の真摯な態度が行間から浮かび上がってくる。不断に問いつづけるこの著者の姿に、幼児理解の在り方が示唆されているように思えた。

加えて、読み手を魅きつけてやまないのは、本書の笑いに対する視野の広さであろう。笑いが全人格に関わるものであり、「人間らしさ」の根源であるという著者は、笑いを通して「子どもの生の姿」を細部で捉えつつ、文化・社会の視点を絡ませ、笑いを全体として捉えようと試みる。

本書を読みすすめる中で、子どもの笑いの世界に引き込まれ、その笑いの意味を共に問いつつ、時に、「近ごろ笑わなくなったなあ」などと、自身の生活の問題として、新たな問いを投

じたくなるのは、この所以であろうか。子どもの笑いの豊かさが途切れるとき、大人の世界の豊かさも危うくなる。また逆もしかりであろう、などという思いに駆られつつ、頁をめくる。本書からもれてくる子どもの笑い声は、軽やかでありながら、しかも、大人の世界に深い揺さぶりをかけてくる。

自己と世界のつなぎ手として立ち現れ、人との関係を深める笑い。時には、自己の危機的な状況を回避する最後のとりでもある笑い。子どもの笑いに注がれる著者のまなざしには、人間に対する静かで熱い思い——存在に対する肯定の態度とでもいえようか——が映し出されているように思えた。

(お茶の水女子大学大学院)